世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『親友アーメンガード』

第４話

制作　日本アニメーション
　　　フ ジ テ レ ビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第四話「親友アーメンガードの巻」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ピーター
アーメンガード
ラビニア
ジェシー
ガートルード
デュファルジュ先生
イライザ叔母さん

アーメンガードの父

花市場のおばさん

マリエット

ロッティ

ジュイン

スーザン

ペネラビ

ジェニファ

ダイアナ

クリスティーン

リンダ

ドルシラ

シーザー（猫）
ジャンプ（小馬）
ボナパルト（オウム）
エミリー（人形）

1

ミンチン女学院・教室

画面に向ったデュファルジュが、女性の仕草で挨拶する
——

デュファルジュ「コマン・タレヴ・アアント……」

教科書を片手に、フランス語の授業——

デュファルジュ「叔母さん、ご機嫌いかがですか? と云う意味だね
……アーメンガード君、読んでごらん」

アーメンガード「は、はい……」

セーラの後ろの席で、アーメンガードが教科書を両手に、
おずおずと立上る。

早くもラビニア、ガートルード、ジェシーたちが、教科
書のかげでクスクス笑い合う。

必死に読みはじめるアーメンガード。

アーメンガード「コ……コメント……アレ……ブス……」

どっと笑うラビニアたち――

セーラ、きっとラビニアたちを見る。

デュファルジュ「ノンノン………もう一度………」

顔面紅潮、泣きそうに読むアーメンガード。

アーメンガード「コメント………アレブス・アンテ………」

ラビニアたち、更にどっと笑う。

デュファルジュ、（オウ……）と両手を拡げ、肩をすくめる。ラビニア達を見たセーラ、耐られず後ろを向き、囁く。

セーラ「コマン・タレブ……よ」

デュファルジュ「セーラ君……」

セーラ、はっと振り向く。

デュファルジュ「読んであげ給え」

セーラ「はい……」

セーラ、アーメンガードの脇に行き囁く。

セーラ「いい、私について云うのよ……（読む）コマンタレブ・アー

ント」
アーメンガード「コ・マンタレブ・アント」
デュファルジュ「ウイウイウイ……それでいいんだよ、アーメンガード君」
ほっと坐る二人——表に振鈴の音。
デュファルジュ「では、今日はここまで……。オ・ルボア・マドモアゼル」
一　同「オ・ルボア・ムシュ・デュファルジュ」
デュファルジュ、教科書を抱えて出て行く。ざわつく教室。ジェシー、アーメンガードの近くに寄り、覗き込んで、いじわるく。
ジェシー「コメント・アレズボウス、アーメンガード」
アーメンガード、泣きそうになってうつむく。どっと笑う、ラビニヤ、ジェシー、ガートルード。セーラ、キッとなる。

セーラ「人の失敗を笑うなんていけないわ」
ラビニア「そう。あなたはお上手よ。お母さんがフランス人ですものね」
ガートルード「そうよ、鼻にかけないでよ」
ラビニア「それにひきかえ、この学校には、フランス語だけでなく、何をやってもだめな人がいるのよ」
と、アーメンガードを見る。ジェシー、ミンチンを真似て、
ジェシー「何です、あなたは！　そんな事ができないとは。学校の恥です！」
顔を見合わせて笑う三人。アーメンガード、部屋の隅へ行って小さくなる。
セーラ「やめなさいよ笑うのは!!」
語気鋭いセーラ。三人、ハッとなって笑いをやめる。
セーラ「人の事をバカにして笑ったりしてはいけないわ」

ラビニア「あなた、とてもやさしいのね。あんなやっかい物をかばうなんて」
ジュシー「ほんと、私達にも」
ガートルード「やさしくしてね」
三人、顔見合わせて笑う。その三人をじっと見つめるセーラ。三人笑いが止って
ラビニア「……⁈な、何よ！」
尚も見つめるセーラ。
ラビニア「……だまっていたんじゃ、判らないじゃないの」
ジェシー「何とか言ったらどうなの⁈」
威すかのような言い方。臆さないセーラ。
しだいにタジタジとなるラビニア達。
ラビニア「フン、かっこつけてるだけじゃない」
と、捨てゼリフ。二人に、
ラビニア「行きましょ」

と、一人でスタスタ行ってしまう。慌てて後を追う二人。
見送ったセーラ、そっとアーメンガードに近づく。その
足音に気がつき、振り向くアーメンガード。セーラ、に
っこり笑って、

セーラ「元気を出して、アーメンガード」

驚いてセーラを見るアーメンガード。

アーメンガード「……」

セーラ微笑で見つめる。アーメンカードもじもじと、

アーメンガード「あの……、さっきは……ありがとう……」

セーラ「いいのよ、そんな事」

と、そっと手をとる。ほほ笑むアーメンガード。

2
外の景色

枯れた木の梢、北風にふるえて、冬の日ざしが教室の窓

にもあたっている。

3 元の教室内

無言で座っているセーラーとアーメンガード。アーメンガード、セーラを見る。ニッコリほほ笑むセーラ、つられてほほ笑むアーメンガード。

アーメンガード「あなたみたいな人……。はじめて………」

セーラ「え⁈どうして？」

アーメンガード「だって、私、学校中で一番勉強ができないの。……そして……、のろまだし……」

セーラ「いけないわ、自分でそう決めては」

アーメンガード「私、あなたみたいに出来たらよかった……。フランス語」

セーラ「お母さんがフランス人で、生まれた時からずっと聞いて育っ

たからなのよ。誰だってしょっちゅう聞いていれば話せるわ」

アーメンガード「ううん!!……だめなの。聞いたでしょ、さっきのフランス語。どうしても言えないの……。だってフランス語ってヘンな言葉なんだもの」

外をじっと見つめるセーラ、思い立って

セーラ「（微笑）ね、私の部屋へ来ない?」

アーメンガード「え……見せてくれるの?」

セーラ「（微笑で頷く）あなたに、エミリーを紹介したいの」

アーメンガード「誰なの、エミリーって」

セーラ「（微笑）私のお友達よ」

アーメンガード「……えっ?!」

4
三階の階段

上って来るセーラ。おずおずとついて来たアーメンガー

ド、たじろいて立ち止る。

セーラー「（振り返る）どうしたの？」

アーメンガード「だって……用がないのに三階に上ってはいけないって、ミンチン先生が………」

セーラ「（微笑）大丈夫よ。あなたは、私のお客様なんですもの」

アーメンガード「私、あなたのお客様なの？」

セーラ「そうよ、だからちゃんと用があるわ……行きましょ」

5

同・セーラの部屋の前

アーメンガードと来るセーラ、声を落す。

セーラ「エミリーはね、私がいない時、いつもお部屋を歩き廻ったり、窓から外を眺めたりしているの……でも、私が帰って来ると、パッと動かなくなってしまうのよ」

アーメンガード「どして？」

セーラ「シィッ……もしかすると、今日はエミリーが歩き廻っている所を見つけられるかも知れないわ……いい？　いち、にの、さんで飛び込むのよ」

アーメンガード「え、ええ……」

期待に胸をふくらませる――

セーラ「いち、にの、さん……！」

二人、ドアを開けざま飛び込む。

6

同・セーラーの部屋

安楽椅子に――　いつものように本を膝に置いた儘坐っているエミリー。

飛び込んだセーラ、吐息で、アーメンガードを振り返る。

机の上に本をおきに行く。

セーラ「また駄目だったわ……私たちに見つかるより早く、椅子に坐

ってしまったのよ」

アーメンガード「エミリーって、お人形だったの」

セーラ「ええ、いつもこうなの、エミリーったら、稲妻みたいに素早いのよ」

アーメンガード「ほ、ほんとに動くの？」

セーラ「勿論よ。私がいない時は、オウムとだってお話してるに違いないわ」

ボナパルトが、突然叫ぶ。

ボナパルト「セーラ……セーラ……」

驚いて見るアーメンガード。

アーメンガード「ほ、ん、と、だァ」

セーラ「（微笑）でしょ」

アーメンガード、エミリーに眼を戻す。

アーメンガード「ね、この子、抱いてもいい」

セーラ「勿論よ、もうあなたとお友達だわ」

アーメンガード、恐る恐るエミリーの腕に触れる——
一瞬、エミリーの眼が動く。
アーメンガード「うわッ」
仰天して飛び退く——
アーメンガード「う、動いたわ、ほんとに」
セーラ「（微笑で頷く）大丈夫よ。きっとエミリーは、あなたを好きよ」
アーメンガード、ためらったが、そっとエミリーを抱き上げる。
アーメンガード「かわいい！……ほんと、今にもお話しそう……」

7 同・セーラの寝室

エミリーを抱いたアーメンガードを案内して来るセーラ
ベッドに掛ける。

恐る恐るのぞくアーメンガード、素晴しい部屋なのでおどろき、ドレッサーを見る！

セーラ「さ、ここの方が楽にお話出来るわ」

手でベッドをさわり、恐る恐るすわるアーメンガード。

アーメンガード、セーラと並んで坐る。

アーメンガード「わあ、フワフワ……私のベッドなんて、ゴッゴッ」

アーメンガード、もじもじと口を切る。

アーメンガード「ね、セーラって呼んでもいい？」

セーラ「（微笑）勿論よ」

アーメンガード「私……あなたの名前大好き」

セーラ「どうして？」

アーメンガード「だって、私の名前、変なんだもの……アーメンガード・セント・ジョン……自分でも笑っちゃうわ」

セーラ「（微笑で首を振る）素敵な名前だわ、私、好きよ」

部屋を見廻したアーメンガード、暖炉の上の銀板写真に

気づく。

アーメンガード「あれ、お父さんとお母さん?」

セーラ「ええ……私ね、いつもエミリーと、インドへ帰ったお父様のこと話してるの……お父様、いまなにしてらっしゃるかしら、とか、エミリー、私、お父様に約束したのよ、淋しくても我慢しますって、とか」

アーメンガード「セーラ、お父さんが好きなのね」

セーラ「ええ、世界中で誰よりも」

アーメンガード、急に沈み込む。

アーメンガード「私……お父さんに、お人形を買って貰った事なんて、一度もないわ」

セーラ「まあ……」

アーメンガード「私のお父さんって、ケンブリッジ大学の教授なの…………」

セーラ「え……………」

8	アーメンガードの家の書斎（インサート）

壁一面の書棚を背に、難しい顔で分厚い本を読んでいるアーメンガードの父親。

アーメンガードの声「外国語が七つも八つも出来て、いつも書斎で本を読んでるわ」

9	ミンチン女学校・セーラの寝室

アーメンガード「だから、頭の悪い私を嫌いみたい……私をこの学校に預けに来た時もこう云ったわ」

10	同・応接間（インサート）

ミンチンの前に、父親とアーメンガード。

父　親「ミンチン先生。この子には無理にでも憶えさせて頂く他ありません。歴史でもフランス語でもです。よろしく願いますぞ」

11 同・セーラの寝室

アーメンガード「家にいた時も、いつも云われてたの」

12 アーメンガードの家の書斎（インサート）

吐息でアーメンガードを見おろす父親。

父　親「矢っ張り、お前の頭の悪いのは、イライザ叔母さんに似たせいだな」

13 ミンチン女学院・セーラの寝室

セーラ「まあ……でもイライザ叔母さんて？」
アーメンガード「お父さんの妹なの。ロンドンに住んでるけど、すごく忘れっぽい人、私そっくり」
突然、はっと立上る。
アーメンガード「大変、忘れてたわ」
セーラ「どうしたの？」
アーメンガード「今日って、イライザ叔母さんの誕生日なの。遊びに行く約束だったの」
セーラ「まあ……いいわ、アーメンガード、私が馬車で送るわ」
アーメンガード「駄目よ。外出は、前の日までに院長先生にお許し頂いとかなきゃ……どうしよう。私馬鹿よね、いつもこれなんだから、ああどうしよう」
悲嘆にくれるアーメンガード、泣き顔になる。
セーラ「判ったわ、私がお願いしてみるわ、行きましょう」

14 同・院長室

困惑して吐息するアメリア――

アメリア「困ったわねえ……院長先生は、お出掛けして夕方までお帰りにならないのよ」

前に、来ているセーラ。

セーラ「でも、なんとかお願い出来ないでしょうか。アーメンガードが可哀想なんです」

15 同・前の廊下

しょんぼり待っているアーメンガード。

16 同・院長室

アメリア「じゃ、こうしましょう……院長先生がお帰りになる夕方までに、必ず帰って来ること」
セーラ「え……」
アメリア「でないと、私が院長先生にひどく叱られてしまいますからね」
セーラ「あ、有難うございます、アメリア先生」

17 同・前の廊下

飛び出して来るセーラ。
セーラ「アーメンガード！　お許しが出たわ」
アーメンガード「え、ほんと？」
にっこりと大きくうなづくセーラ

18 同・表

走り着く馬車に、待っていたセーラとアーメンガードが
駆け寄って乗り込む。

セーラ「ピーター、急いで」

ピーター「判りました、お嬢様」

ひと鞭あてて馬車を走り出させる。

×　　×　　×

玄関口で、口惜し気に見送るラビニア、ジェシー、ガートルード。

ジェシー「勝手だわ……私たちなんてめったに外出できないのに……」

ガートルード「フン、馬車まで持ってるからって、ヒイキのしすぎよ」

ラビニア「（冷笑）見てるといいわ。あの子たち、今に思い知らせてあげるから」

（中CM）

19	ワーテルロー・ブリッジ

ピーターの操るセーラたちの馬車が渡る。

20	走るその馬車の上

並んで乗っているセーラとアーメンガード。

アーメンガード「私、こんな素敵な馬車で行けるなんて、夢みたい…
ありがと、セーラ」

セーラ「(微笑)いいのよ、そんなこと……それより、イライザ叔母
様って、どんな方なの」

アーメンガード「とても私を可愛がってくれてるの。私も大好き」

セーラ、頷く――

アーメンガード「でも、お父さんに云わせると、変人なんですって」

セーラ「どうして?」

アーメンガード「だって、庭中に草を植えて喜んでるんですもの」
セーラ「草を……？」
アーメンガード「それで、薬を作って、みんなに配るのが、愉しみなの……セーラも、行けばすすめられるわ」
セーラ「まあ……」
アーメンガード「大変、忘れてたわ」
セーラ「え、また？」
アーメンガード「誕生日のお祝いに、お花を持ってく約束だったの。どうしよう」
セーラ「ピーター……」
ピーター、振返る。
ピーター「はい、お嬢様……」
セーラ「悪いけど、何処かで花屋さんに寄って頂戴」
ピーター「判りました、お嬢様……」
大きく脇道に馬車を乗り入れる。

21

コベント・ガーデン・マーケット・全景

おびただしい買出し人の雑踏――

22

その雑踏の中

ピーターが、セーラとアーメンガードを案内して来る。

ピーター「お嬢様……ここがロンドン名物、コベント・ガーデン・マーケットですよ」

セーラ「……だけど、こんな所に、お花屋さんがあるの?」

ピーター「ありますとも……花市場から肉市場、なんでもございですす」

「どいたどいた……」と買出人が通る。

驚くセーラーとアーメンガード。

23

花市場の一角

肥った花売りのおばさんが花を揃えている。セーラたちと来るピーター。

ピーター「よう、おばさん」

おばさん「（振返る）まあ、ピーター……あんた、たいそうな働き口を見つけたんだってねえ」

ピーター「へへ、このお嬢様の所さ」

セーラ「こんにちは……」

おばさん「ひゃあ……まるでプリンセス様みたいなお嬢様じゃないか。ようこそ」

ピーター「おばさん、誕生日のお祝いにする花を買いに来たんだ。みつくろっておくれよ」

おばさん「ありがとよ……じゃ、これと……これと…これと……」

おばさん、花桶から次々に抜く。

おばさん「こんな所でどうかね。4ペンスだけど」

ピーター「そりゃないよ、おばさん……見た所、3ペンスがいいとこ

おばさん「（吐息）相変らずだねえ、いいよ、あんたの事だからおまけしとくよ」

だな」

ピーター「有難う！　ついでにこれもおまけね」

ひょいと花桶から一本抜いてつけ足す。

おばさん「ピーター……あんたにゃ負けたよ」

ピーター、セーラたちを振返るとニヤリと片眼をつぶってみせる。

唖然と顔を見合せたセーラたち。

24 ロンドン郊外の道

セーラたちの馬車が来る――

25 その馬車の上

小さな花束を持ったアーメンガードが、

アーメンガード「あ、あそこの家よ」

26

イライザ叔母さんの家・表

馬車が停り、セーラとアーメンガードが降り立つ。

ピーター「じゃ、ここで待ってますから」

セーラ「お願いね、ピーター」

二人、玄関口へ行く——

アーメンガード「（ノック）こんにちは、イライザ叔母さん」

やがて、ドアが開き、気の良さそうなイライザ叔母さんが顔を出す。

イライザ「まあ、アーメンガード……遅いからまた忘れてるんじゃないかと心配してさ」

アーメンガード「うん、お友達に馬車で送って貰ったの」

セーラ「セーラです。はじめまして」
イライザ「まあ、この子にお友達が出来たなんて、はじめて」
ふと馬車のピーターに気づく。
イライザ「おや、あの子は？」
セーラ「ピーターです」
イライザ「（呼ぶ）ペテロ！」
アーメンガード「ピーターよ」
イライザ「（呼ぶ）ピート！」
アーメンガード「（セーラに）これだもの」
ジャンプの首をなでていたピーターが、帽子を手に近づく。
ピーター「あの、ぼくをお呼びですか」
イライザ「そうよ、お客様は多い方がいいわ、あなたもお入りなさい」
ピーター、泥靴を気にする。
ピーター「でも、靴が泥んこだし……」

イライザ「いいのよ、泥ぐらい……なんならそこで落とせばいいわ」

ピーター、ドア脇の「泥落し」で靴をこする。

イライザ「そうそう、それで立派な紳士（ジェントルマン）よ」

ピーター「ひゃあ、ほんとみたいだ」

どっと笑う四人――

27 同・居間

テーブルに着いたセーラ、アーメンガード、かしこまったピーターの所へ、イライザがポットとカップの盆を運んで来る。

イライザ「さ、私が育てたバラの花で作ったローズティよ、召上れ」

セーラ「まあ、いい香り」

イライザ「それからこれは、ラベンダーの花の砂糖漬け……」

ピーター「いただきまあす」

ピーター、その砂糖菓子を口に入れる。

ピーター「わあ、こんなおいしいお菓子、はじめてだ」

笑うイライザたち。

セーラ「(囁く)アーメンガード……」

アーメンガード「あ、忘れてた……これ、お誕生日のお祝い」

手にした花束を渡す。

イライザ「まあ、ありがと、アーメンガード」

セーラ「(囁く)フランス語よ……」

アーメンガード「(頷いて)コ、コマンタレヴ・アント」

イライザ「んまあ、とうとうフランス語が憶えられたんだね」

アーメンガード「ウフフ、セーラのおかげなの」

イライザ「ありがとう、セーラさん……。私はね、この子にあなたのような素晴しいお友達が出来てうれしいわ。今日はゆっくりして行って下さいね」

セーラ「は、はい。有りがとうございます」

イライザ「後で薬を作る所をお見せしますからね」
アーメンガード「おばさん……また！」

28

ミンチン女子学院・事務室

アメリアがイライラと歩き回っている。
アメリア「（つぶやく）遅いわ、早く帰ってこないと……」

29

イライザ叔母さんの家・居間

にぎやかに談笑している。
イライザ「私は、病気になっても、みんな自分で作った薬草で治しちゃうの」
セーラ「じゃあピーターのお母さんに作って下さると……」
イライザ「まあ、どこが悪いの？」

ピーター「心臓がずっと……」
イライザ「まあ…、それならばクリスマスローズが一番！　今作って
上げるわ」
いそいそと隣室へ行く。
アーメンガード「ね、これだもの」
セーラ「でも、とてもいい叔母様だわ。ね、ピーター」
ピーター「そうですとも御嬢様」

30 ミンチン女学院・二階廊下

窓外を見ているラビニア達三人。ミンチン帰って来る。
ジェシー、ミンチンの怒る真似をして見せる。笑う三人。

31 同・事務室

アメリア、外を見てうなだれる。

32

イライザ叔母さんの家・表

馬車に乗っている、二人。

セーラ「じゃ、叔母様、ごきげんよう」

イライザ「また遊びに来てね、今度はキャラウエイ入りのケーキを作

っておくわ」

走り出す馬車。

ピーター「ごちそう様でした！」

33

馬車の上（夕景）

セーラ「ピーター、急いでね」

ピーター「大丈夫です、近道を飛ばしますよ」

猛然と走り抜けるピーターの馬車。

×　×　×

座席にしがみついて叫ぶセーラ

セーラ「しっかり摑って！　私たち今、シンデレラと同じなのよ！」

アーメンガード「え……」

セーラ「ほら、王子様の舞踏会の帰りの所よ！」

34　セーラのイメージ・モンタージュ

――突っ走るシンデレラの馬車。

セーラの声「12時までに帰らないと、魔法が解けて、馬車はカボチャに戻っちゃうでしょ。それで、走って、走って、やっと間に合うのよ……」

35　ミーチン女学院・表（夜）

走り込む馬車から飛び出すセーラたち、
入口へ走る——

36

同・玄関ホール（夜）

飛び込んだ二人、愕然と立尽す。
鋭い眼で立っているミンチン——
ミンチン「アーメンガード……来なさい」
いきなり腕をとると引立てる。
茫然と取残されるセーラ。
その前をシーザーがゆっくりと横切る。

37

同・院長室の前（夜）

そっと近づくセーラ。

38

同・院長室（夜）

泣いているアーメンガードの前に、鞭を手にしたミンチン。

ミンチン「院長の私に許可を貰うのを忘れて、外出出来るとでも思ってたんですか」

アメリア「お姉様、ですからそれは、私が」

ミンチン「あなたは黙って……こう云う子供は、きつい罰を与えて教えるしかないんです」

その時、飛び込んで来るセーラ。

セーラ「院長先生、アーメンガードを誘ったのは私なんです。罰を与えるなら、私に与えて下さい」

カッとなるミンチン。

アメリア「お、お姉様……そんな事をして、もしセーラさんのお父様に知れたら……」

ミンチン、かろうじて怒りを静める。

ミンチン「セーラさん……アーメンガードをかばうのは立派です。でも、二度と同じ事をしたら絶対に許しませんからね」

セーラ「はい……」

ミーチン「二人とも帰ってよろしい」

39 同・廊下（夜）

出て来るセーラとアーメンガード。

アーメンガード「ありがと、セーラ……でも、私のために、あなたまで」

セーラ「（微笑）いいのよ、アーメンガード」

アーメンガード「ね、セーラ……こんなことがあっても、私のお友達になってくれる？」

セーラ「（頷く）私たち、もうとっくに親友の筈よ」

アーメンガード「嬉しい……セーラ」

40

同・セーラの寝室（夜）

じっと父母の写真をみつめるセーラ。

セーラのM「アーメンガードは、とても素直な優しいお友達です。お父様も、いつかアーメンガードに逢ったら、きっとそう思うに違いないと思います……」

（第四話　終）